

第二言語習得理論の指導試案

—— 教育への応用を中心としたカリキュラム ——

(A curriculum design for teaching how to apply SLA theory)

稲葉 みどり

1. はじめに

近年、日本語教育が多様化するとともに、教師の資質や教育能力が様々な角度から論じられるようになった。日本語教育能力検定試験の施行と相まって、教育能力の測定と評価、能力育成に対する関心も高まってきている。日本語を教えるには、日本語に関する知識、教授法や教材・教具に関する知識、学習者の母語、学習歴、適性に関する知識、教室活動の技術・経験などの多くの能力が必要とされる。

外国語教育においては、コミュニケーション・アプローチ、ナチュラル・アプローチ、トータル・フィジカル・レスポンスなどを始めとして多くのアプローチや教授法が提唱され、現場の教師には、学習者のニーズにあった教授法を選定したり、多様な学習目的に即応できる柔軟性が必要とされてきている。特に、最近では学習方略や第二言語習得に関する理解が深まり、これらの研究成果を教授法や教材作成に応用する能力の必要性も重視されている。

そこで本稿では、第二言語習得理論を日本語教育に必要な能力の下位項目ととらえ、その指導方法について考察する。筆者は、専門学校日本語教師養成講座の受講生を対象とし、第二言語習得理論の教育への応用を中心としたカリキュラムを作成した。ここでは、そのカリキュラムと指導例を試案として紹介する。

2. 第二言語習得理論の必要性

教師には、なぜ第二言語習得理論に関する知識が必要なのかを考えてみよう。

これまでの第二言語習得研究では、学習者は必ずしも教師が教えたように言語を習得するとは限らず、習得には学習者自身も様々な要因が関与することが明らかにされてきた。その結果、教師の役割に対する考え方も少しずつ変化してきている。従来は、教師は学習者に対して単に文法を分かりやすく説明したり、例文を提示したり、練習したりすることが重要な役割と考えられ、学習項目、提出順序、導入語彙などは教師が中心となって設定していた。しかし、近年では、学習者の言語習得過程、学習方略、適性などを配慮し、学習者が習得しやすい環境や条件を整えるなど、学習の補佐をすることが教師の重要な役割と考えられるようになった。したがって、どう教えるかという教師側の視点と同時に、学習者がどう習得するかという学習者側の視点からも教授法を考えなければならない。それには、第二言語習得理論に関する理解を深める必要があり、教師は次のような観点や教育能力を備えていることが望ましい。

- (1) 学習者の第二言語の習得順序、習得過程に即して指導項目を提示する。
- (2) 学習者の認知スタイルや学習方略に即した教授法を開発する。
- (3) 第一言語の影響（正の役割、負の役割）を配慮した教授法を用いる。
- (4) 言語転移・過剰般化・化石化を防ぐ方策を考える。
- (5) 学習者の年齢、性格、適性、個人差等を配慮した指導をする。

教師がこれらの理論を踏まえた上で、第二言語習得に対して積極的な役割を果たすにはどうしたらよいかを考えれば、いっそう効果的な言語教育が可能になるであろう。

3. カリキュラムの基本概念

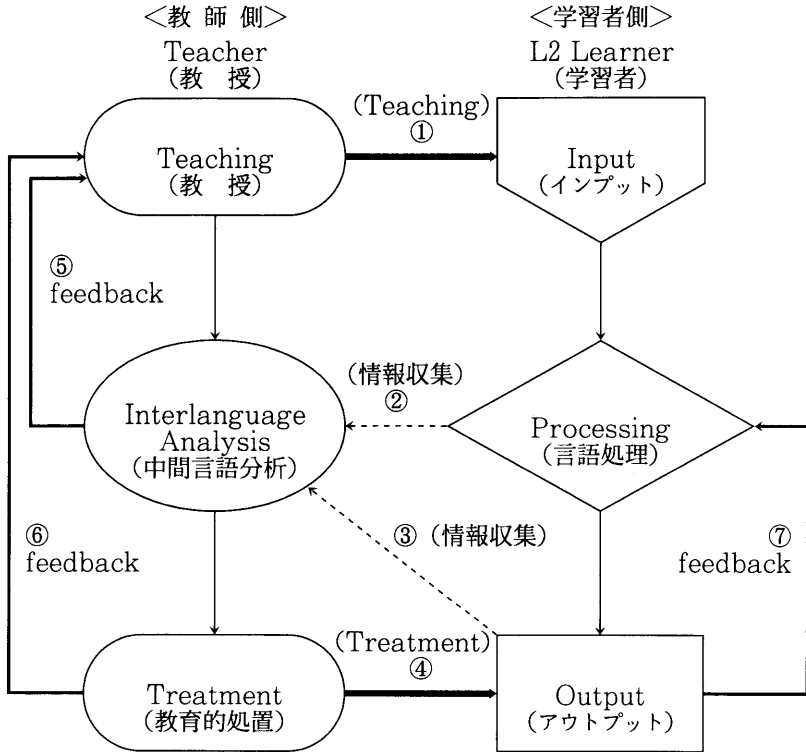
第二言語習得理論の指導にあたっては、教師と学習者の関わりを〈図-1〉のような図式でとらえ、これをカリキュラム作成の基本的な考え方とした。ここでは、教師の役割と学習者の習得過程を次のようにとらえている。

〈教師側〉

- (1) Teaching (教授)

学習者にインプットを与える (①)。(授業外のインプットも考えられるが

<図-1> 第二言語習得における教師の学習者の関わり
(Instructed Second Language Acquisition Model)



ここでは考察を授業に絞る。)

(2) Interlanguage Analysis (中間言語分析)

インプットされた言語情報と学習者からアウトプットされた言語情報、及び、第二言語習得のプロセスに関与する様々な要因を手がかりとして学習者の中間言語を分析する (②③)。結果を Treatment (④) や教授法にフィードバックする (⑤)。

(3) Treatment (教育的処置)

学習者のアウトプットに対して正否の判断を示したり、(中間言語の分析の結果をもとに) 誤用を訂正するなどの教育的処置を行う。処置の結果、処

置方法の適切性を検討し、教授法にフィードバックする (⑥)。

<学習者側>

(4) Input (インプット)

教師から言語情報を受け取り、学習のデータを収集する。ここではインプットを「学習者が接触し、学習のデータにすることができる言語の意 (Ellis 1985)」と扱っている。

(5) Processing (言語処理)

インプットされた言語情報を処理 (解読, 記憶, 体系化, 仮説の検証等) する。ここでは、第一言語, 学習方略等多くの要因が関与すると考えられる。

(6) Output (アウトプット)

Processing の結果をアウトプット (学習者が産出する言語の意) する。アウトプットに対して、教師から得られた処置を Processing にフィードバックする (⑦)。

4. カリキュラムの対象者・対象講座

4-1 対象者

カリキュラムの対象者は、筆者の教える専門学校日本語教師養成講座の受講生で、その内訳は以下のとおりである。

<平成3年度の受講生>

人	数	14名
年	齢	20代10名, 30代3名, 50代1名
学	歴	大卒 7名, 短大卒 6名, 専門学校卒 1名
職	歴	会社員, 教員, 語学 (日本語以外) 講師等
日本語教育	歴	なし
備	考	留学生1名 (大卒) 韓国

4-2 対象講座

カリキュラムの対象とする講座は、下記の12講座 (年間授業時間数634) 中の1講座である。筆者が担当するのは「学習者の習得過程と評価法」と題する講義

で、学習者の習得過程、及び、評価法を中心とした知識や教育能力の養成を目的としている*1。

<講座内容>

「日本語教育概説」	「言語学」	「学習者の習得過程と評価法」
「日本語文法」	「対照言語——日英」	「教材・教具論」
「日本語史」	「対照言語——日中」	「日本語教授法Ⅰ」
「音声学」	「対照言語——日韓」	「日本語教授法Ⅱ」

5. カリキュラム

5-1 目標

第二言語習得に関する理論的な知識を深めるとともに、第二言語習得の観点から見た教授法や授業のあり方、教師の役割等を検討し、授業（教育の場）で活かせるような教育能力の基礎作りを目標とする。

指導項目は、<図-1>の枠組みを基に、次の(1)~(5)を重点とした。

- (1) 第二言語習得に関する理論的基盤を構築する。
- (2) 第二言語習得における授業の役割に関する理解を深める。
- (3) 授業分析を通して、望ましい教師の資質を検討する。
- (4) 中間言語分析の理論的基礎を構築する。
- (5) 中間言語分析を通じて、学習者の誤用の原因や教育的処置の方法、指導上の留意点等を検討する。

以下、順にこれらの指導項目の細目と指導例を紹介する。なお、授業スケジュールについては、注2を参照されたい。

5-2 第二言語習得の基礎的知識の構築

Understanding Research in Second Language Acquisition (Rod Ellis 著, Oxford University Press, 1985) の第1章を主教材として用い、第二言語習得の基本的な概念、用語、これまでの第二言語習得研究に関する基礎的な知識の構築を目的とした。さらに、第二言語習得の理論の日本語教育への応用可能性についても検討し、次のような点を指導に盛り込んだ。

- (1) ある言語資料をもとに第二言語習得の過程を解明しようとする場合、どのような情報が必要か。何を考慮すべきか。
(例) 学習レベル/母語/学習歴/教科書/学習環境/性格/適性等
- (2) 第一言語は第二言語習得にどのような影響を与えるか。
(例) 干渉/促進/正の転移/負の転移
- (3) 言語転移はどのような場合、どのようなレベルで起こるか。
(例) 言語間の距離/学習レベル/教授法/語彙/発音/談話
- (4) 化石化はどのような場合、どのような言語レベルで起こるか。
(例) 年齢/学習レベル/文法/発音/談話
- (5) 学習者の誤りの原因として、どのようなことが考えられるか。
(例) 第一言語/過剰般化/訓練の転移/発達上の誤り
- (6) どのような学習者が言語学習に最適か。‘Good Language Learner’の条件とは。
(例) 性格/認知スタイル/動機づけ/適性/年齢
- (7) 学習者の学習方略に沿った教授法とは。
- (8) 自分の外国語の学習経験から、望ましい教授法とはどのようなものであると考えられるか。

5-3 第二言語習得における授業の役割の認識

ここでは、授業 (formal instruction) が第二言語習得にどのような役割を果たせるかに関する理解を深めることを目的とした。授業が習得順序や習得過程にどのような影響を与えるかに関しては、まだはっきりとした結論は出ていないが、授業の有効性や効果に関する様々な研究*³を概観し (以下の(1)~(5)), 教授法を考える場合の留意点とした。

- (1) 授業は習得の速度 (rate of acquisition) を上げる。(Gass 1982, Long 1983, Weslander and Stephany 1983, Long 1988)
- (2) 授業は習得の最終到達度 (ultimate attainment) を上げる。(Pica 1983, Zobl 1985, Swain 1985, Long 1988)
- (3) 授業は文法性判断の正確度を上げる。(Schumann 1978; Lightbown, Spada

and Wallace 1980; Ellis 1984; Kaida 1988; Ellis 1990)

- (4) 授業は学習の初期の段階での化石化を防ぐのに効果がある。(Ellis 1990)
- (5) 言語特徴にはある段階的な発達に沿って習得される特徴 (developmental features) と、発達とは無関係に自由に習得される特徴 (variational features) があり、発達段階に即した授業ならば前者の習得を促進する。(Meisel, Clashen and Pienemann 1981)

5-4 授業分析

ここでは、第二言語習得の観点から見た望ましい教師の資質に関する理解を深めることを目的とした。授業分析を通じて、教師の資質、指導方法、教授法、授業のあり方等について以下の点を検討しながら講義を進めた*4。

- (1) インプットは多量に与えているか。
- (2) 習得を促進するためにどのような工夫をしているか。
- (3) 学習方略、母語、個人差、レベル差を配慮した指導をしているか。
- (4) 誤りに対する対処の方法は学習者のフィードバックを促しているか。
- (5) 化石化や言語転移を防ぐためにどのような工夫をしているか。

授業分析の方法としては、まず受講生が良い教師、望ましくない教師とはどういう教師かを個人個人でリストアップし、これをもとにディスカッションを行った。その後、チェックリストをもって授業参観*5に臨み、授業参観後、さらに検討を重ねた。

5-5 中間言語分析の理論の構築

教育の現場で教師が学習者の誤用に対して適切な指導やフィードバックを与えるためには、学習者の中間言語を分析し、その基盤となる誤用の性質や原因、学習者のレベル、言語習得の特性等をくわしく把握することが必要である。ここでは日本語学習者の中間言語の誤用を分析し、誤りの訂正方法に関しての理論構築を目的とした。テキストは『英語の誤答分析』(垣田直巳監修 大修館書店 1983)の第2章、第7章を使用し、以下の項目を中心に指導を進めた。

- (1) 何を誤り (誤用・誤答) と考えるか。

(例) 質的分析／量的分析／error と mistake の区別

(2) 誤りをどのように分類するか。

(例) 誤りの段階の分類 (pre-systematic/systematic/post-systematic, Corder 1973)

言語レベルによる分類 (orthography & phonology/lexicon/grammar/discourse)

外的特徴による分類 (addition/omission substitution/reordering Brown 1980)

(3) 誤りの原因は何であろうか。

(例) 母語干渉／言語内の誤り／発達上の誤り／誘発された誤り／伝達方略による誤り／学習方略による誤り

(4) 誤りの訂正は学習者にどのような影響を与えるか。

(5) 教師は誤りにどう対処するべきか。何を考慮すべきか。

(例) 誤りの種類／誤りの性質／誤りの頻度／授業全体の目標／個々の練習目標／学習者の性格／適性／年齢／時間的制約

5-6 中間言語分析 I

ここでは、実際に学習者の言語資料を分析することにより、指導に役立てられる能力の養成を目的とした。中間言語分析 I では、短文レベルの誤用文を第二言語習得理論、誤用分析の理論を応用して分析した。

言語資料は『誤用文の分析と研究』（森田良行著，明治書院 1985）の中から受講生が一文ずつ選択し（別添資料 1 参照），授業で受講生（発表者）の分析，他の受講生の分析，教師の分析（筆者自身），本の著書の分析を比較検討することにより，誤用に対する様々な見方の養成に努めた。この本の中から誤文を選ぶことにした理由は，誤用に関する説明があり，観点の相違や説明の方法等の差異を比較でき，多くの観点からの考察が可能になるからである。以下は分析の留意点である。

(1) どこが間違っているのか。

(2) どういうレベルの誤用か。

- (3) どう訂正したらいいのか。
- (4) 誤用の原因は何であろうか。
- (5) 教える場合の留意点は。

5-6 中間言語分析Ⅱ

ここでは、受講生が言語資料の中から自分で誤用を見つけ出し、誤用の分類、原因、訂正の方法等を検討することにより、学習者の言語習得上の問題点を予測したり、指導法にどう取り入れるかを考察する総合的な能力の育成をめざした。

言語資料は、受講生が日本語学習者から直接収集したもの、この専門学校の日本語科から譲り受けた資料、教師が予め配布したものなど(別添資料2参照)様々な形態のものを用いた。

6. 問題点と今後の課題

以上、日本語教師養成講座における第二言語習得理論の指導試案を展開してきたが、カリキュラムには日本語教育に必要な第二言語習得に関する知識のほんの一部しか盛り込むことができなかった。講義では時間の制約もあり、大半が理論の導入が中心となってしまった。実際の作業も授業分析、中間言語分析に留まっている。授業分析において授業参観の機会が少なく、限られた形態の授業しか参観することができず、分析の範囲が狭められた。中間言語の分析においては、学習者の教授法、学習環境、個人に関わる要素等に関して十分な情報が得られない場合があり、これらの観点からの分析が十分に行えず、問題点として残った。

今後は、第二言語習得理論の応用可能性をさらに検討し、このカリキュラムを改善していきたい。

注

- (1) この講座は、前期に学習者の習得過程を中心とした授業を行い、後期に評価法に関する授業を予定している。ここでカリキュラムの対象とするのは、前期(80分18回)の授業である。

(2) 授業スケジュール

<図-2> 授業スケジュール

指導項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月
(1) 第二言語習得理論	6 ←————→					
(2) 授業の役割		6 ←————→				
(3) 授業分析		3 ←————→				
(4) 中間言語分析の理論			8 ←————→			
(5) 中間言語分析 I			4 ←————→			
中間言語分析 II						4 ←————→

授業は週1回90分。数字は該当項目の授業回数。

- (3) 授業は学習者の自然な習得順序や習得過程には影響を与えたり、変えたりすることはあまりないとする研究もある (Dulay and Burt 1973; Krashen, Sferlazza, Feldman and Fathman 1976; Krashen and Seliger 1976; Felix 1981; Pienemann 1984)
- (4) 教材選択の適切性、指導項目の提出順序等に関する考察は、受講生に日本語教育経験がほとんどないことを考慮すると、一回だけの授業参観では十分な判断ができないので今回は行わなかった。
- (5) 授業参観では、この専門学校の日本語科の授業の初級、中級、上級のクラスを一人一回ずつ見学した。

参 考 文 献

- 垣田直巳監修 (1983). 『英語の誤答分析』大修館書店.
- 森田良行 (1985). 『誤用文の分析と研究』明治書院.
- Brown, H. D. (1980). *Principles of Language Learning and Teaching*. Prentice Hall.
- Corder, S. P. (1973). *Introducing Applied Linguistics*. Penguin Books.
- Dulay, H. and Burt, M. (1973). Should we teach children syntax? *Language Learning* 22, pp. 37-53.
- Ellis, R. (1984). Can syntax be taught? A study of the effects of formal instruction on the acquisition of WH questions by children. *Applied Linguistics* 5, pp. 138-155.
- Ellis, R. (1985). *Understanding Research in Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Ellis, R. (1990). *Instructed Second Language Acquisition*. Blackwell.
- Gass, S. (1982). From theory to practice. In Ruthterford, W. and Hines, M. (eds.), *On TESOL '81*, Washington, D. C., TESOL.
- Gass, S. and Maden, C. (eds.) (1985). *Input in Second Language Acquisition*.

Newbury House.

- Kaida, K. (1988). The effect of formal instruction on monitored and spontaneous naturalistic interlanguage performance. *TESOL Quarterly* 22, pp. 509-515.
- Krashen, S., and Seliger, H. (1976). The role of formal and informal linguistic environments in adult second language learning. *International Journal of Psycholinguistics* 3, pp. 15-21.
- Krashen, S., Sferlazza, V; and Feldman, L. and Fathman, A. (1976). Adult performance on the SLOPE test: More evidence for a natural sequence in adult second language acquisition. *Language Learning* 26, pp. 145-151.
- Lightbown, P.; Spada, N.; and Wallece, R. (1980). Some effects of instruction on child and adolescent ESL learners. In Scacella and Krashen (1980).
- Long, M. (1983). Does second language instruction make a difference? *TESOL Quarterly* 17, pp. 359-982.
- Long, M. (1988). Instructed interlanguage development. In Beebe, L. (ed.) *Issues in Second Language Aquisition: Multiple Perspectives*. Newbury House. pp. 113-141.
- Meisel, J.; Clashen, H. and Pienemann, M. (1981). On determining developmental stages in natural second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition* 3, pp. 109-135.
- Pica, T. (1983). Adult acquisition of English as a second language under different conditions of exposure. *Language Learning* 33, pp. 465-497.
- Pienemann, M. (1984). Psychological constraints on the teachability of languages. *Studies in Second Language Acquisition* 6, pp. 186-214.
- Scacella, R. and Krashen, S. (eds.) (1980). *Research in Second Language Acquisition*. Newbury House.
- Schumann, J. (1978). *The Pidginization Process: A Model for Second Language Acquisition*. Newbury House.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In Gass and Madden (1985). pp. 235-235.
- Weslander, D. and Stephany G. (1983). Evaluation of English as a second language program for southeast Asian students, *TESOL Quarterly* 17, pp. 473-480.
- Zobl, H. (1985). Grammars in search of input and intake. In Gass and Maden (1985). pp. 329-344.

資 料 1

〈受講生が取り上げた誤用文〉

夜店に見に行きました。
 父は散歩しに行きました。
 見つけないように隠れました。
 きのお公園に言った約束をしました。
 まさか良くなりませんと思います。
 日本へ来て三年以内になります。
 身ぐるみ剥がれた。
 ビールをコップと持って来い。
 彼女は涙が出るほど喜んでた。
 電話を掛けようとしたが、掛からなかった。
 危ないところが助かった。
 私の財布はすりにすられた。
 荷物が重くて持ってください。
 教室の中で勉強します。

森田 (1985) より

資 料 2

〈教師が配付した誤用分析資料〉

初級 作 文 400字程度 タイトル『わたしの町』
 (アメリカ・フィリピン・インド・インドネシア他)
 初級 作 文 400字程度 タイトル『わたしの冬休み』
 (アメリカ・カナダ・インド・インドネシア他)
 中級 手紙文 400字程度 ある手紙に対する返事
 (アメリカ・インド)
 中級 作 文 400字程度 4コマ漫画を作文したもの
 (アメリカ)
 中級 音声資料 15分程度 ストーリーテリングによるもの 4点
 (アメリカ)
 中級 作 文 600字程度 ゴールデンウィーク中の出来事に関する作文
 (中国・韓国)
 中級 作 文 800字程度 映画の感想文
 (中国)